

百花台遺跡



1985・3

長崎県教育委員会

はじめに

このたび、百花台遺跡の写真集を公刊することになりました。

この写真集は百花台広域公園建設計画と県道開見～雲仙線改良工事に伴い、長崎県教育委員会が緊急発掘調査を実施している遺跡の調査成果を、中間報告書として取りまとめたものであります。

発掘調査は、昭和58年6月から着手して、現在も実施しております。その結果、先土器時代～弥生時代・近世との複合遺跡で、2万点を超える遺物や遺構群が検出されました。

文化財保護行政は遺跡の現状保存が望ましいが、開発事業のはざまで、不作為の遺跡破壊を回避する為にも、開発との調整を行い、出来るだけ遺跡を保存するようにし、必要止むを得ない場合は、発掘調査を実施し、遺跡を「記録」として保存しております。

埋蔵文化財は、私たちが祖先から受け継いだ貴重な遺産ですので、後世に引き継ぐことが私たちの責務であります。この写真集を通して、埋蔵文化財についての理解を深めていただければ幸甚です。

昭和60年3月

長崎県教育長

伊藤 昭六

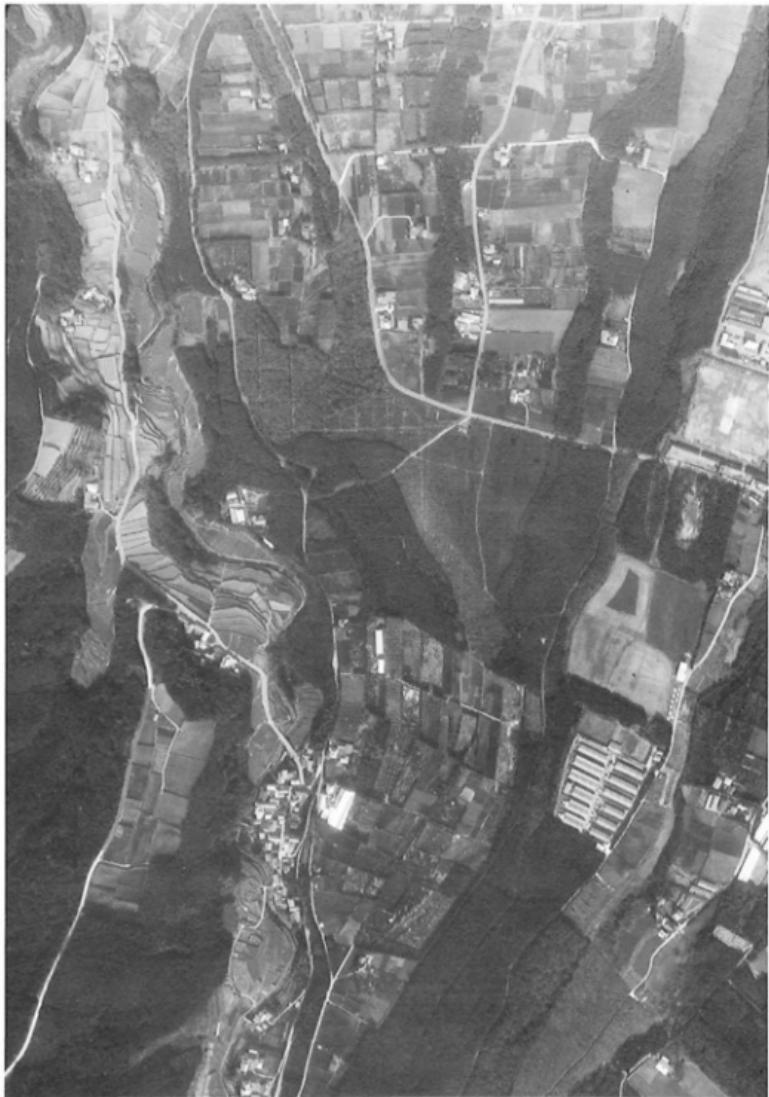
例言

1. 本書は昭和57年度～昭和59年度まで実施した県立百花台広域公園建設計画および県道国見～雪崩線改良工事に伴う百花台遺跡緊急発掘調査の記録写真集である。
 2. 調査は長崎県教育委員会が行い教育庁文化課田川 肇（主任文化財保護主事）・副島和明（文化財保護主事）が担当した。
 3. 麻生 優（千葉大教授）・岡本東三（文化庁調査官）の指導助言を得た。また、県都市計画課・同道路建設課・島原振興局都市計画課・同道路課・国見町・同教育委員会の関係各機関の協力を得た。（本文中の敬称略）
 4. 本書は田川・副島が執筆し、整理作業は麻生美代子・鶴巣富子・幸田七つみ・広川裕子の協力による。
 5. 本書の編集は田川・副島が担当した。
 6. 出土遺物は、現在百花台遺跡発掘調査事務所で整理中である。

.....

目次

I.	地理的歴史的環境	5
II.	調査に至る経過	6
III.	調査概要	6
	1. 範囲確認調査（試掘調査）	
	2. 層序	
	3. 発掘調査	
	4. 遺構	
	5. 遺物	
IV.	まとめ	35



百花台遺跡航空写真（島原振興局都市計画課提供）



百花台遺跡遠景



百花台遺跡近景



周辺の遺跡

- 1. 梨山遺跡
- 2. 堀団A遺跡
- 3. 堀団B遺跡
- 4. 堀団C遺跡
- 5. 百花台A遺跡
- 6. 百花台B遺跡
- 7. 百花台C遺跡
- 8. 百花台D遺跡
- 9. 百花台E遺跡
- 10. 百花台F遺跡
- 11. 魚洗川A遺跡
- 12. 魚洗川C遺跡
- 13. 魚洗川B遺跡

I. 地理的歴史的環境

百花台遺跡は南高来郡国見町に所在し、普賢岳を主峰に国見岳・妙見岳・野岳と連なる雲仙火山体の北麓に烏甲山（822m）・舞岳（703m）があり、その山麓地の北部に魚洗川・^{御川}黒川と多比良川に囲まれた火山性扇状地が形成されている。その扇状地の標高200～230m程の台地上に立地する。

遺跡は台地の西側に集中し、その裾を魚洗川が流れる。今回の調査で魚洗川の旧河川の状況が調査区（8区）の西側で検出され、その堆積も下層より礫層・砂層・礫層・2枚の黒褐色の火山灰土と砂層、第Ⅳ層～第Ⅱ層と層序状況が観察され、数次に渡っての流路痕跡がみられる。このことは第Ⅳ層堆積前までは、水系の傍に遺跡が立地していたことが窺われる。

周辺の遺跡--百花台遺跡は百花台A～F遺跡を含み、先土器～繩文・弥生時代までの複合遺跡で、遺跡群として捉えることにする。（昭和58・59年度に長崎県教育委員会が調査を実施した遺跡は百花台D遺跡で、表掲の遺物は百花台A遺跡のものである。遺跡名称は昭和59年9月に長崎県教育委員会発行の遺跡地図による。）

百花台遺跡の調査区でナイフ形石器を主体とする石器群が層位的に発掘されたが、細石器文化の細石刃・細石核は僅か1点の出土であり、細石器文化期の遺跡の立地は百花台A～C遺跡と今回の調査区より以北に限られるようだ。

百花台A～F遺跡は先土器時代～繩文時代にかけての遺跡で、A遺跡（百花台北遺跡、S地点¹）はナイフ形石器・尖頭器類・細石刃・細石核・剥片等と繩文早期の上器片が採集される良好な遺跡である。B・F遺跡・魚洗川A遺跡は昭和57・58年に県教委で当該工事に伴って試掘調査を実施した。B・F遺跡は繩文早・晚期の遺物が出土する。C遺跡は昭和38年、40年に学術調査²が実施された既知の百花台遺跡である。D遺跡は今回の写真集掲載遺跡。E遺跡（百花台東遺跡³）も昭和58・59年に学術調査が実施され、ナイフ形石器・剥片・尖頭器等が層位的に出土している。魚洗川A遺跡の東側一帯に30箇所の試掘塙を入れたが、近世の遺物を除き遺物の出土はない。遺跡の主体は西側に含まれるのであろう。

魚洗川B・C遺跡、堀廻A～C遺跡、栗山遺跡で先土器～繩文時代にかけての遺物が採集されている。また堀廻A遺跡（小ヶ倉遺跡）は昭和35年に学術調査が実施されている。

これらの周辺には、繩文後期の筏遺跡・小原下遺跡、繩文早・晚期の礫石原遺跡、晚期の山ノ寺遺跡、弥生時代の景華園遺跡支石墓群、古墳時代後期の高下古墳・金山古墳・尾ノ口古墳等、先土器時代～古墳時代まで数多くの遺跡が知られている。

註1. 小畠弘己「百花台遺跡S地点の石器群」『赤れんが』第2号 1982

2. 麻生 優・白石浩之「百花台遺跡」『日本の旧石器文化』遺跡と遺物(下) 雄山閣 1976

3. 百花台遺跡発掘調査團『百花台 1983』 1984

II 調査に至る経過

●発見から学術調査まで 昭和30年頃古田正隆によって発見される。(古田1983) 昭和38年、故和島誠一・麻生 優の第一次の発掘調査を契機にその存在が学界で注目を浴び、昭和40年(麻生 優)、昭和57・58・59年(古田正隆・松藤和人・諫見富士郎)と5回にわたる学術調査が実施されている。

《県文化課関係》

●分布調査 [期間:昭和55年10月30日~11月1日 調査員:安楽勉・平野敏和]

昭和40年の学術調査以来10余年を経て、百花台公園公園建設設計画および県道国見~雲仙線改良工事計画の策定に及んで、事の重大さに鑑み、区域内および周辺域の分布調査を実施し5箇所の遺跡をリストアップして関係機関(県都市計画課・同道路建設課)と協議。範囲確認調査を実施し、その結果に基づき計画策定の見直し、不可避の場合は本調査を実施することとした。

III 調査概要

1. 範囲確認調査(試掘調査)

(公園) 昭和57年度 [期間:昭和57年7月5日~8月30日 調査員:田川・副島]

●第一次範囲確認調査 調査対象面積26haと広大であるため50mメッシュに分割。番号を1~136まで付す。更に本調査に備えて5m四方に細分割し、2m×2mの試掘場を入れた。(番号を西から東へA-B-C~T、南から北へ1-2-3~20と座標系とした)現有姿が山林であるため地形の一望がきかず、試掘場はA列・K列、1列・11列と規則的に配した。(別図参照)本年度の調査対象区域を調査事務所前から西走る脇道以南10haとした。その結果、工事予定区域の西北部により良好な包蔵状況を呈し、その範囲は20,000m²と広く、特に先上器時代の良好な遺物包含層がその中に10,000m²包蔵されていると推察された。また、同区域内に江戸時代後期の紀年銘をもつ埴裏も存在し、その対応も考慮するところとなった。 調査面積176m²

(道路) 昭和57年度 [期間:昭和58年3月15日~3月30日 調査員:田川・副島]

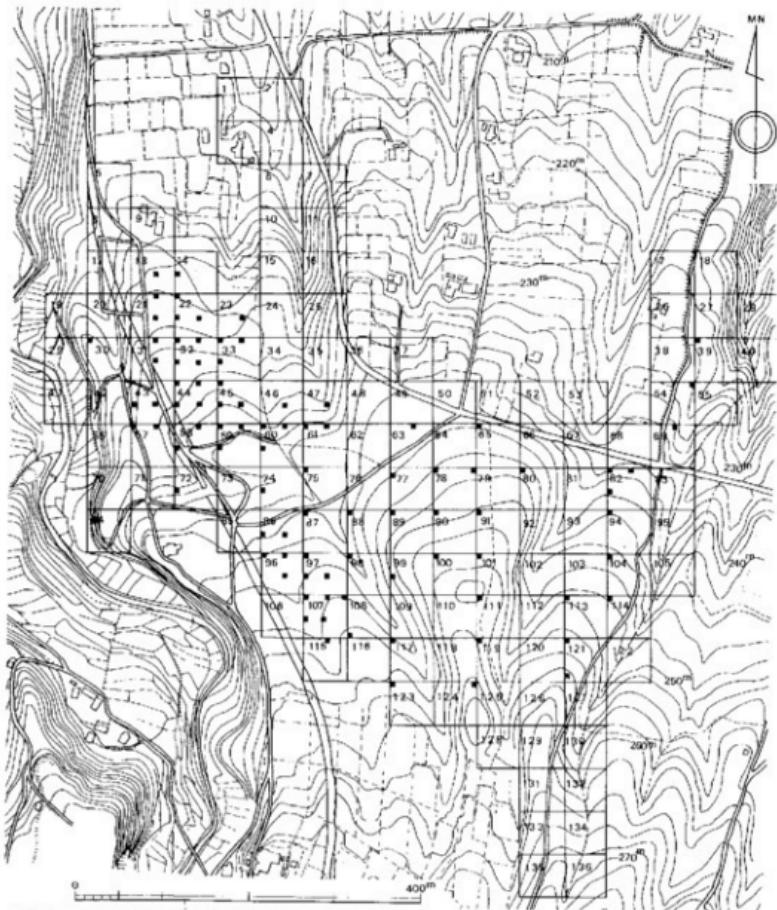
既存の県道を改良拡幅する計画で、県道愛野~島原線と交差する部分から以南が調査対象区域となる。地形にあわせて任意に2m×2mの試掘場(A~Tまで11箇所——別図参照)を設定した。その結果、ほぼ全域に比較的良好な包含状況がみられた。3結果に区分しそれにあわせて本調査が必要であるとした。①最重要区域(H~L付近) ②重要区域(O-S-T付近) ③織文時代の包含層の顕著な発達をみる区域(A~G付近) 調査面積80m²

(公園) 昭和58年度 [期間:昭和58年4月11日~6月4日 調査員:田川・副島・町田利幸]

●第二次範囲確認調査 調査対象面積15.9ha。今回の調査対象区域は東および南部の緩かな台地斜面であり、良好な包含状況を予察させる地点もあったが遺物の出土状況は決して良くなく、

土層の堆積も良い状況ではなかった。(一部、谷部にあたる部分では流水による二次堆積が見られた。)また、遺構として捉えられるものもなく概して粗の部分と判断した。調査面積 188m²

以上2年の成果からして、良好な包蔵状況を示す部分は計画区域内の北西部に集中すると推察し、施設設置計画の検討が加えられるに及んで極力現地保存することとした。不可避部分は発掘調査することとなり同年度から引き続き本調査を実施することになる。



百花台公園建設計画関係百花台遺跡範囲確認調査



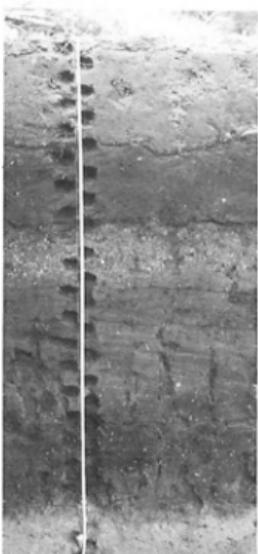
渠道国見～雲仙縣改良工事関係百花台遺跡範囲確認調査

2. 層序

百花台遺跡の上層は基本的に第Ⅰ層～第Ⅷ層・黄色粘質土層に至るまで火山灰が堆積し、広域火山灰の姶良Tn火山灰（約21,000年～22,000年前）が第Ⅶ層、鬼界アカホヤ火山灰（約6,400年前）が第Ⅱ層中に検出されている。

地域的に第Ⅱ層が2枚に分れ、縄文晩期と早期の遺物が出土する。また調査区の57区一帯に第Ⅵ層が第Ⅵa・b層の2枚に分れ、第Ⅵb層はa層に比べてバミスの粒が大きく、密集する状況で含まれ、黒褐色粘質土を呈す地点がある。

遺跡の基本層序は第Ⅰ層・表土層（約20～30cm）。第Ⅱ層・黄褐色火山灰土で、軟質である（約40～50cm）。第Ⅲ層・黒色火山灰土で軟質である（約40～50cm）。第Ⅳ層・混疊灰黑色土で、バミスを含む硬質の火山灰土（約30～40cm）。第Ⅴ層・茶褐色土で、第Ⅳ・VI層間に顕著にバミスを含まず、軟らかい（約10～20cm）。第Ⅵ層は暗褐色粘質土層で、バミスを含み硬質で、乾くとクラックが生じる（約30～50cm）。第Ⅶ層は軟質の黒色火山灰土である（約10～30cm）。第Ⅷ層は黄色粘質土層で、バミスを含む。巨石および礫を含む。深掘された地点で、8m程も堆積を呈す。



32区壁面写真

百花台遺跡土層模式図

3. 発掘調査

(公園) 第一次・第二次範囲確認調査の結果に基づき設計変更を行い、不可避であった部分は記録保存することとし、第二次範囲確認調査後直ちに調査に着手した。

●昭和58年度〔期間；昭和58年6月6日～10月4日 調査員；田川・副島・伴耕一朗〕

この区域は関係施設が集中する所であり、また遺物包含層が良好な状態で残存する所でもある。施設で破壊される部分のみ対象とした。園路部は当計画区域の最北端部にあたり良好な包含状況が予察されたが結果は芳しいものではなかった。排水溝部分は、現道に隣接した部分に遺物の集中地点を検出したが工事区域外にその多くを見る。ソフトボール場外堤部は最多調査面積地区でこれまで未確認であったⅦ層から遺物の出土をみ、6層もの遺物包含層を有する遺跡となった。各層とも遺物が集中する密な部分と粗の部分がある。調査面積1,206.5m²

●昭和59年度〔期間；昭和59年7月9日～11月16日 調査員；田川・副島〕

ソフトボール場外堤部の拡張区、ゲートボール場および排水溝部を調査した。土層の堆積状況はこれまでと基本的に相違はないが、南端の谷部に面する台地端ではⅦ層が上・下2層に区分された。石器製作址を連想させる遺物集中箇所も数箇所検出した。これらは単にある層においてのみ見られるものでも決してなく、重層分布的傾向を顯示しながらⅦ層にその高い比率をみせる。包含される石器類も碎片が圧倒的に多く、次いで剝片の順となる。広大に分布する本遺跡はこれまでの調査により次第にその利用状況が明確に捉えられつつある。調査面積1,290m²

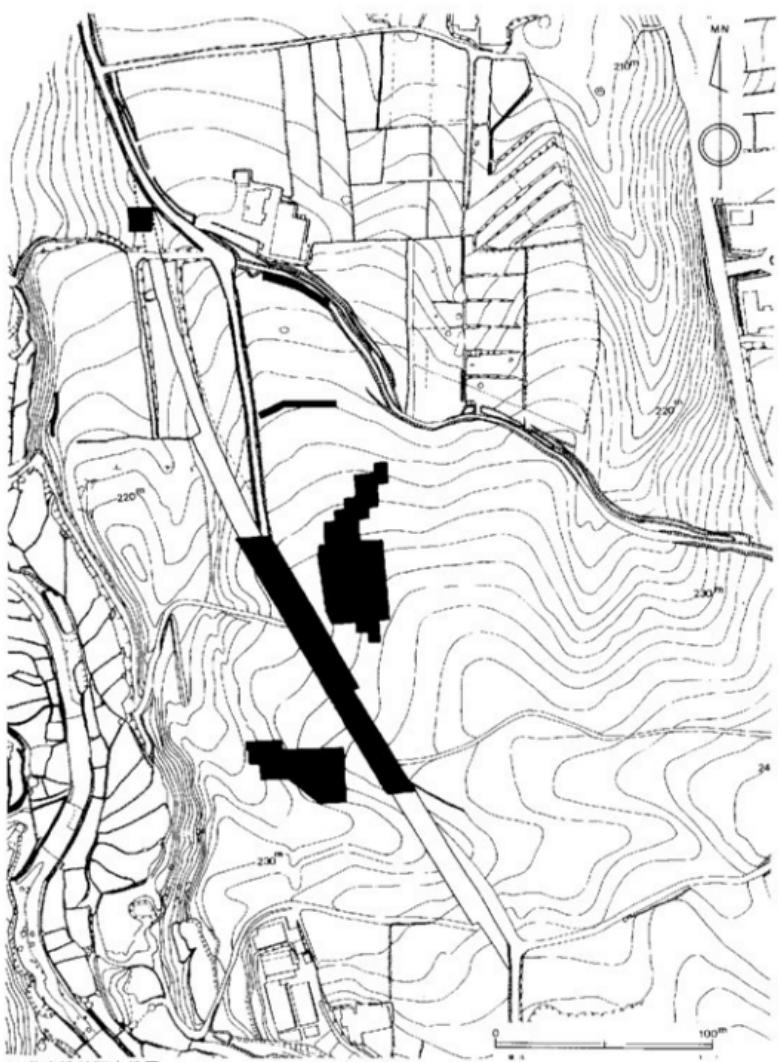
(道路) 調査対象地をグリッドに分割し、公園との関連性をもたせた。

●昭和58年度〔期間；昭和58年10月5日～昭和59年1月25日 調査員；田川・副島〕

範囲確認調査の結果はほぼ全域に遺跡の広がりをみたため、工事行程にあわせて調査を実施した。グリッド番号の呼称は公園に準じている。本年度の調査区はゆるやかな台地端部にあたる。調査区中央付近に浅い谷が嵌入し土層の堆積が非常に厚く調査は難行した。公園調査区と同様な調査結果であり、遺物集中地点・集石は付近全域に分布しているものと解される。遺物包含層は南側（雲仙岳側）に厚く堆積する。調査も大詰めになって大雪が降り予定通り終了することが出来ず、調査期間の延長を余儀なくされた。調査面積921.95m²

●昭和59年度〔期間；昭和59年4月9日～7月18日 調査員；田川・副島〕

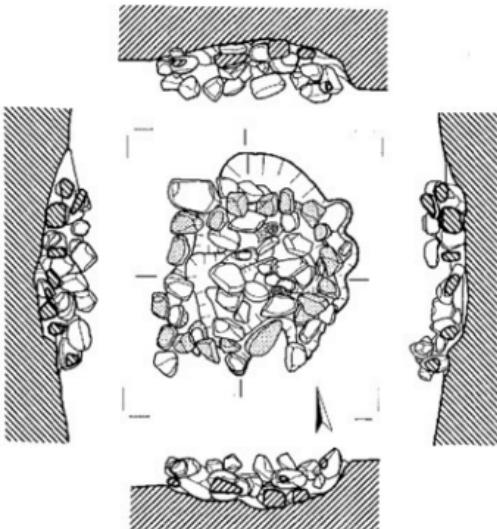
全体的にみて土層の堆積状況は従来通りの様相を呈する。また、各層における遺物の集中地点・集石状況も変化がみられない。8区は従前の様相と多少相違する調査区で、台地の西端部に位置する。上層の堆積状況に多少の変化がみられ、基本的な堆積状況に砂層や礫層等の堆積が数層みられ、相当の水の影響を窺わせる。これらの層からも遺物の出土はみるが流れ込みによるものと考えられるもその間の粘質土層が基本標識土層のどれに対比できるかは今後に残された課題である。とはいえ、台地上でみせるのと違った利用状況が台地端とくに水路との関係で捉えられるのではないだろうか。調査面積830m²



百花台道路調查地区

4. 遺構

- 百花台遺跡の遺構は、①先土器時代 ②縄文時代 ③江戸時代のものと3様にわけられる。
- 集石遺構 とくにⅣ層において顕著にみられる。拳大以下の安山岩風化礫で構成される。かなり広範囲に面的分布をみせ、ある地点で集中する。肉眼的観察では人為的加工痕、火痕等残さず、この点からは単にその使用法、目的等は推測するに留まる。これらの礫群中にも遺物の出土は認めるが、他地点にみる高集中度はない。台地端に造営された礫群にはかなり自然地形に影響を受けて存しているように感じられる。
 - 炉址 これまで焚火の跡は数箇所みられたが、其伴遺物の出土をみないことや搅乱状態などにより時期的な判断が出来なかった。57-3G区からの検出はⅢ層上面であり押型文期のものであろうと思われる。拳大・幼児頭大の大きさの石をほぼ円形に組み、径約50cmを測る。(第1号炉址) 台地斜面上に造営されているが、周側の礫はほぼ水平に設置されている。炉内には、あたかも五徳を偲ばせるレベルを整えた礫も数個配してある。東隣する第2号炉址は損壊しているが、同様の形態と考えられる。レベルも同位であるが、周辺に柱穴痕等が見当たらず、しかも上層がフカフカでしまりがなく、住居址内における炉か屋外のものかの判定はつかない。
 - 街道 佐賀藩領神代から千々石に抜ける主要街道であった。殿様道ともいえ絵図に描かれて



第1号炉址(57-36区)(1/40)

いる。現在の県道ができるまで使用されていた。街道は谷をまわり込み、台地裾を切り適當されている。山手側には素掘りの側構を設置するなど丁寧な道路である。路面は、造営時の側突きによるものか、往時の人々の往来によるものか、堅く緻っており數度の改修が調査区断面において看取できる。

- 墓地 街道沿いに「寛政〇年」紀年銘の墓標が横臥している。他に3基あり墓塚らしき跡もある。



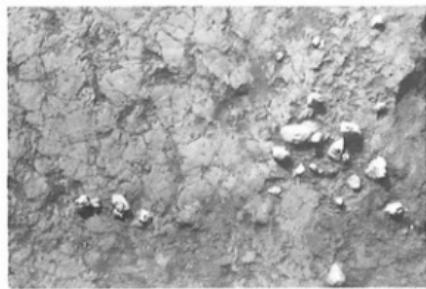
第Ⅲ層・第Ⅰ号炉址(57区)



第Ⅳ層・集石(31区)



第Ⅳ層・集石(43区)



第Ⅴ層・集石(31区)

5. 遺物

百花台遺跡は第II層～第IV層までの6枚の遺物包含層が検出され、第VII層～第III層まで先土器時代の文化層、第III層～第II層が縄文時代の文化層である。また、第VI層下部に姶良Tn火山灰（AT）、第II層に鬼界アカホヤ火山灰（Ah）の広域火山灰が検出されている。

先土器時代の遺物—第VII層の遺物はAT下位の黒色火山灰土より出土し、綫長剝片利用で二側縁加工のナイフ形石器・剝片の打面を側縁部に利用し、表・裏面に調整加工を施した台形様石器・削器・礫器・敲石・剝片が出土する。

AT直上の第VI層の遺物は多種多様な器種がある。ナイフ形石器は綫長剝片利用で二側縁加工の大形・小形のもの（黒曜石製）と横長剝片利用で一側縁加工（安山岩製）のものが出土。台形様石器は枝去木型・原の辻型・源貞型および急角度の刃済し加工を二側縁に施し三角形状を呈すもの、側縁部の2次加工に錯交剥離を施すものなど多数出土。また多種の尖頭器類は綫長剝片を利用した剝片尖頭器・横長剝片で安山岩製の三棱尖頭器・角錐状石器・削器・錐・使用痕のある剝片・折断剝片・石核（両設打面をもつもの、表・背面に剝片剥離痕を残すものなど）・剝片などが多数出土する。

第V層の遺物は綫長剝片利用で二側縁加工を施す大形・小形のナイフ形石器（黒曜石製）と横長剝片利用で一側縁加工のナイフ形石器・台形様石器は枝去木型・原の辻型および錯交剥離・平坦剥離を施すものが顕著である。基部加工を施した剝片尖頭器・角錐状石器・三棱尖頭器（一～三面加工）・削器・ハンマーストーン・敲石・石核・剝片・碎片等出土する。

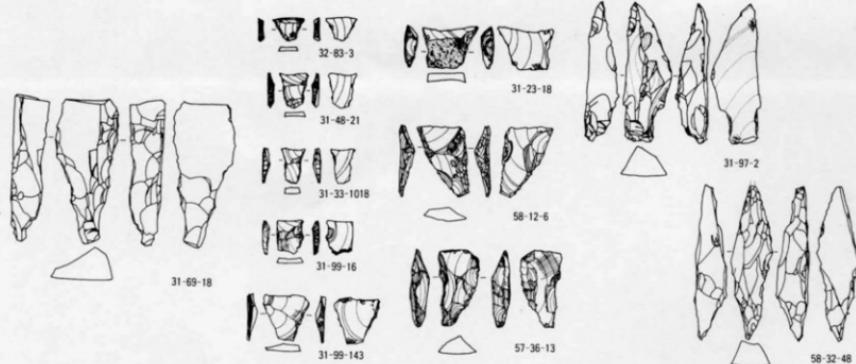
第IV層は綫長剝片利用のナイフ形石器・百花台型台形石器・枝去木型台形様石器・剝片尖頭器・角錐状石器・三棱尖頭器・搔器・削器・剝片等出土。

第III層の出土遺物はナイフ形石器・台形様石器・三棱尖頭器（一面加工）と細石核が出土するが少ない。第III層は、縄文早期の押型文土器が出土し、先土器～縄文早期頃までの文化層で地域的に時間的な差はあるにしても平面的な生活の場として利用されたものであろう。

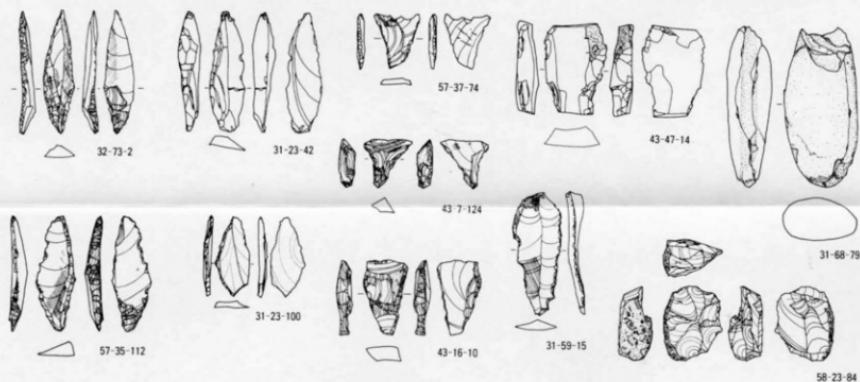
縄文時代の遺物—第III、II層に縄文早期の押型文土器・塞ノ神式土器の土器類に石錨・石斧・石匙・スクレイバーの石器類と縄文晚期の砾石原式土器・石錨・石斧の土器・石器類が地点を異にして出土する。

先土器時代の遺物遺存状況は径5m内外の範囲に遺物が集中する傾向がみられる。また2つの文化層に跨る石器群と単独の石器群があり、第VII層・第VII層上部～VI層下部・第VI層下部・第VI層・第VI層上部～第V層・第V層・第IV層と平面的な遺物の分布が同地点あるいは地点を異にして各集中範囲の遺物遺存状況がある。このことは遺跡での「生活の場」の形成がある程度の時間的な継続性を保ち、遺跡での一面的利用とは別に多面的な利用が遺物の遺存状況に反映したのであろう。また層位別と各石器群単位での遺跡の復元が必要であろう。これらの遺物の集中範囲は石器製作場あるいは住居址と考えられる。

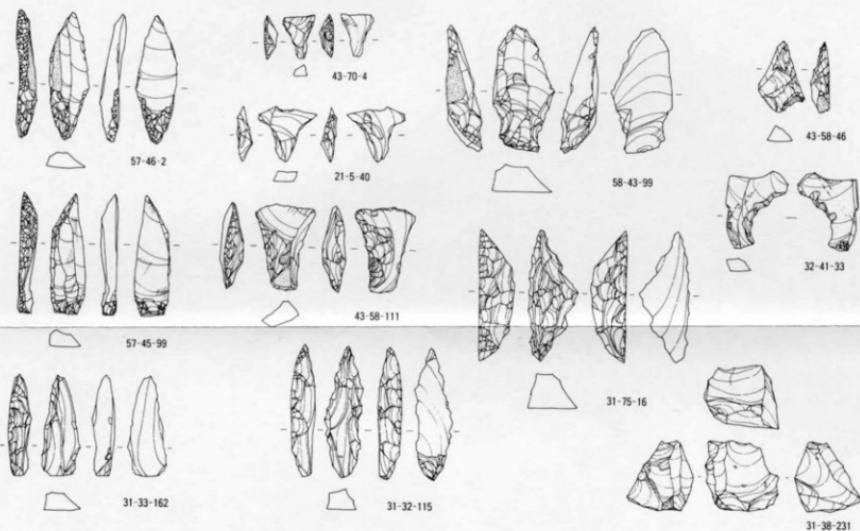
第IV層



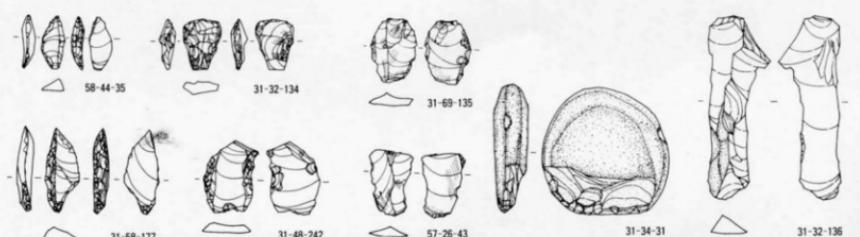
第V層

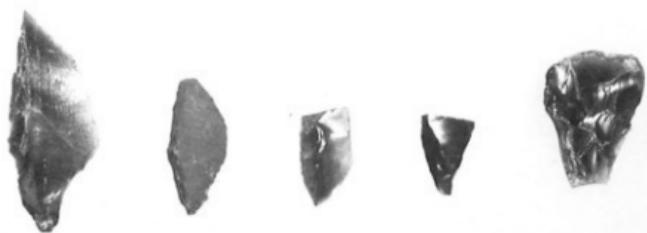


第VI層



第VII層





先土器時代 第VII層出土石器—ナイフ形石器・台形様石器・削器・硃器・剝片(1/1)



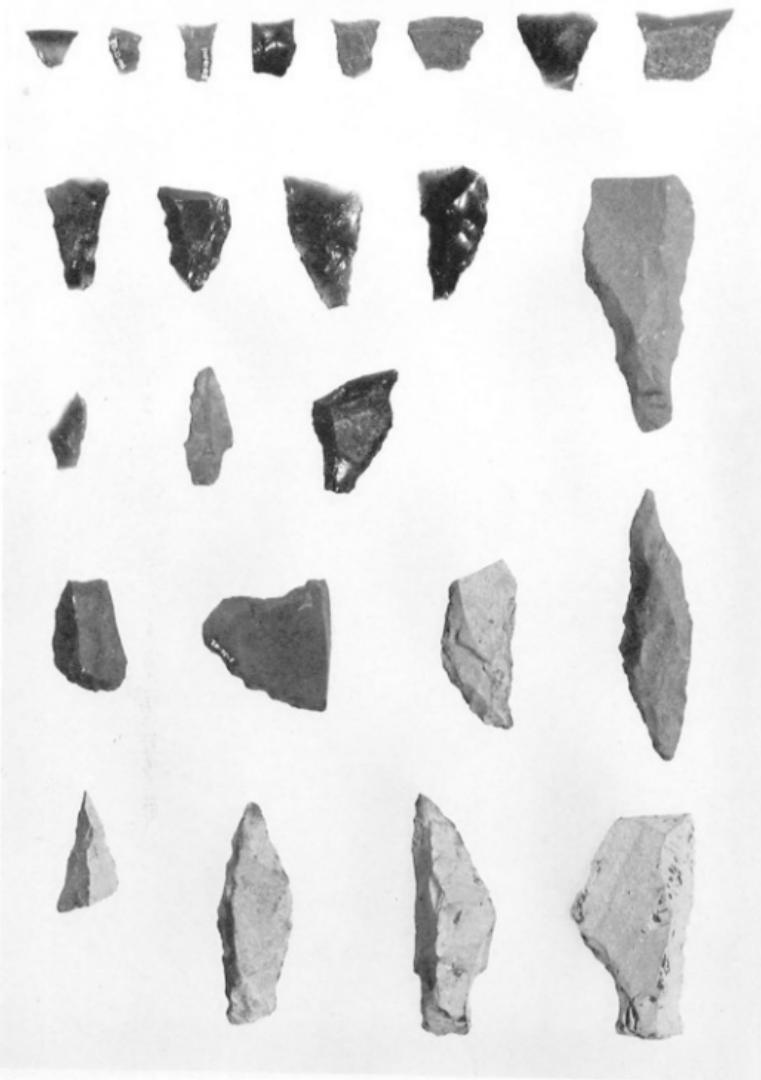
先土器時代 第VI層出土石器①—ナイフ形石器・台形様石器 (2/3)



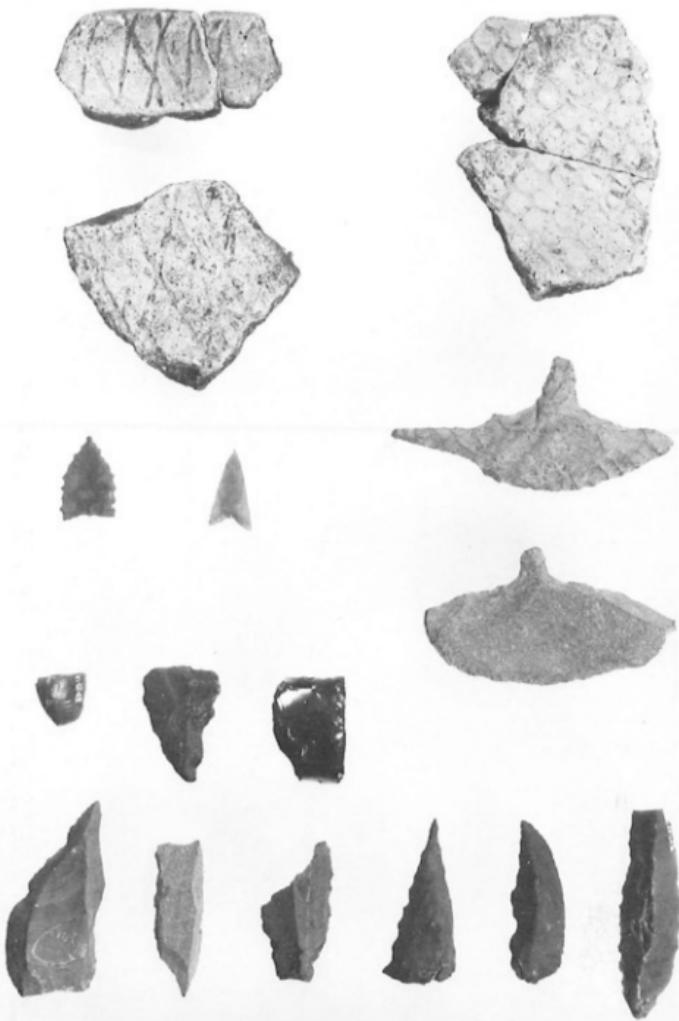
先土器時代 第VI層出土石器②—尖頭器類・撲器・石核・剝片 (2/3)



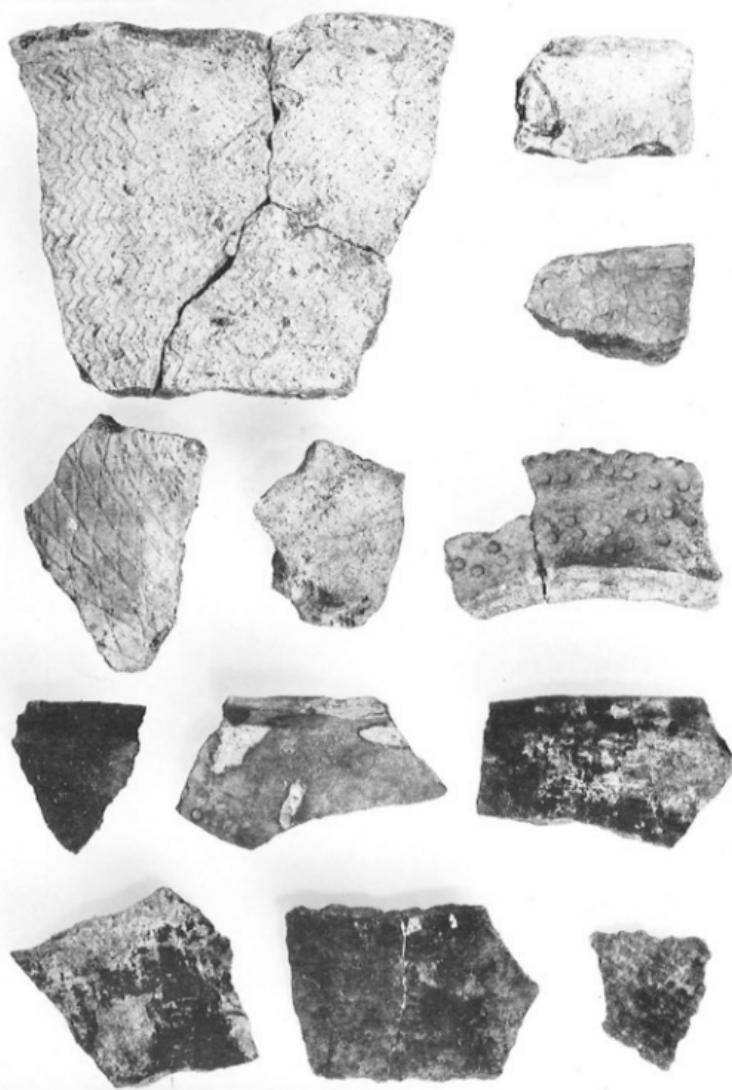
先土器時代 第V層出土石器—ナイフ形石器・台形様石器・尖頭器類・ハンマーストーン(2/3)



先土器時代 第IV層出土石器－台形石器・合形様石器・ナイフ形石器・尖頭器類（2/3）



先土器～縄文時代 第III層出土土器・石器 (2/3)



縄文時代 第II層出土土器(2/3)



縄文時代 第11層出土石器 (2/3)



百花台遺跡採集資料 (2/3)



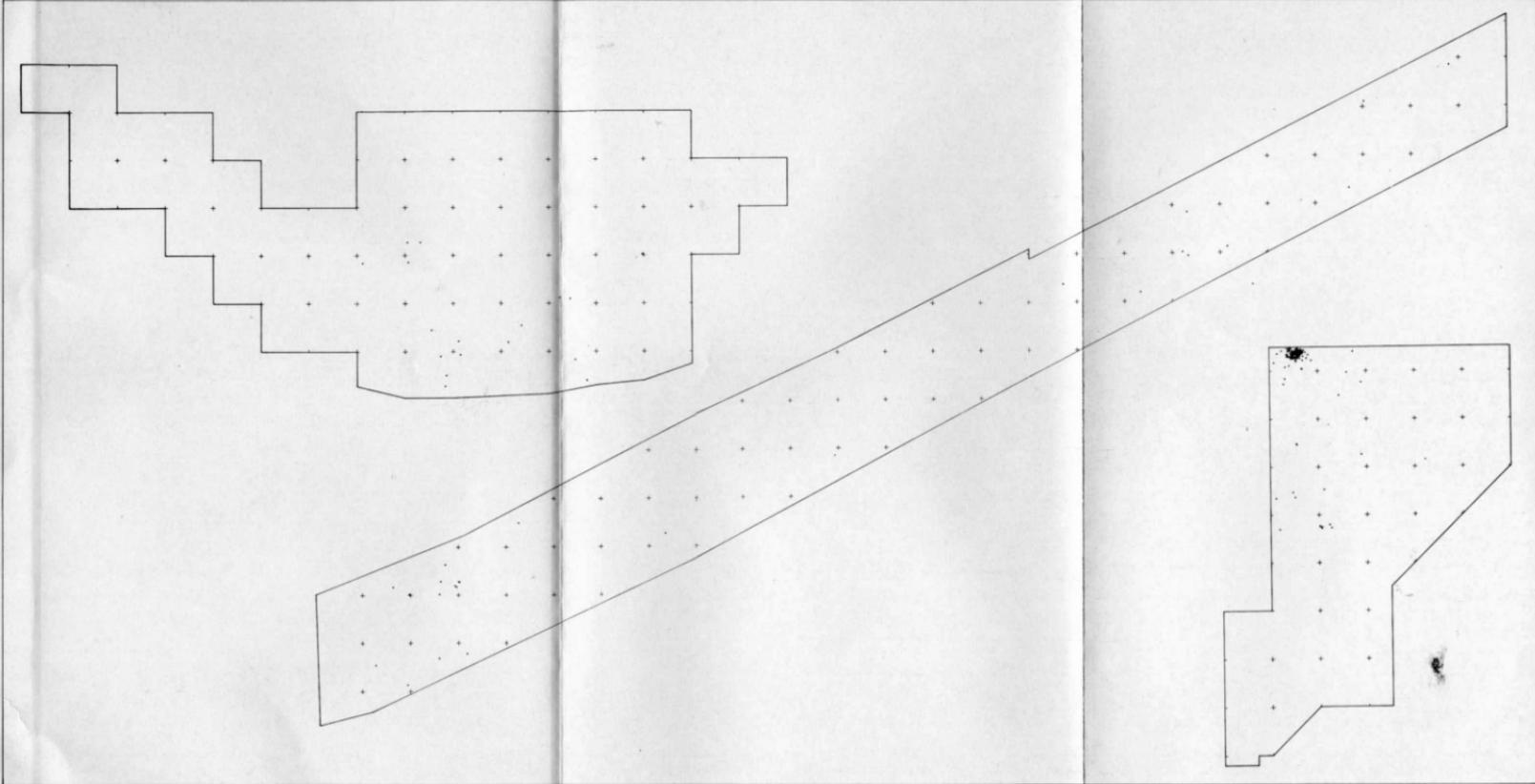
第V層炭化物検出状況(31区)



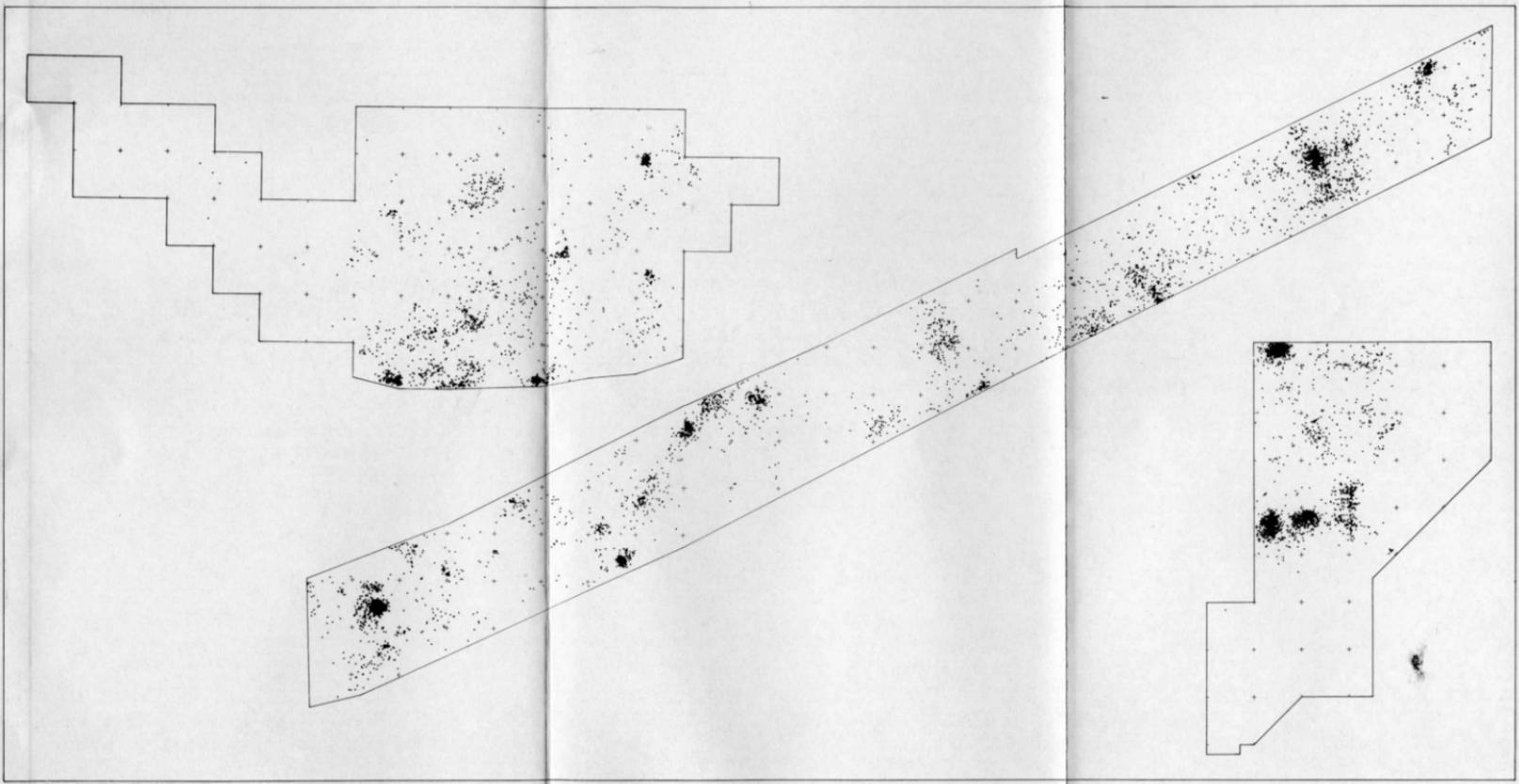
第V層遺物出土状況写真(57区)



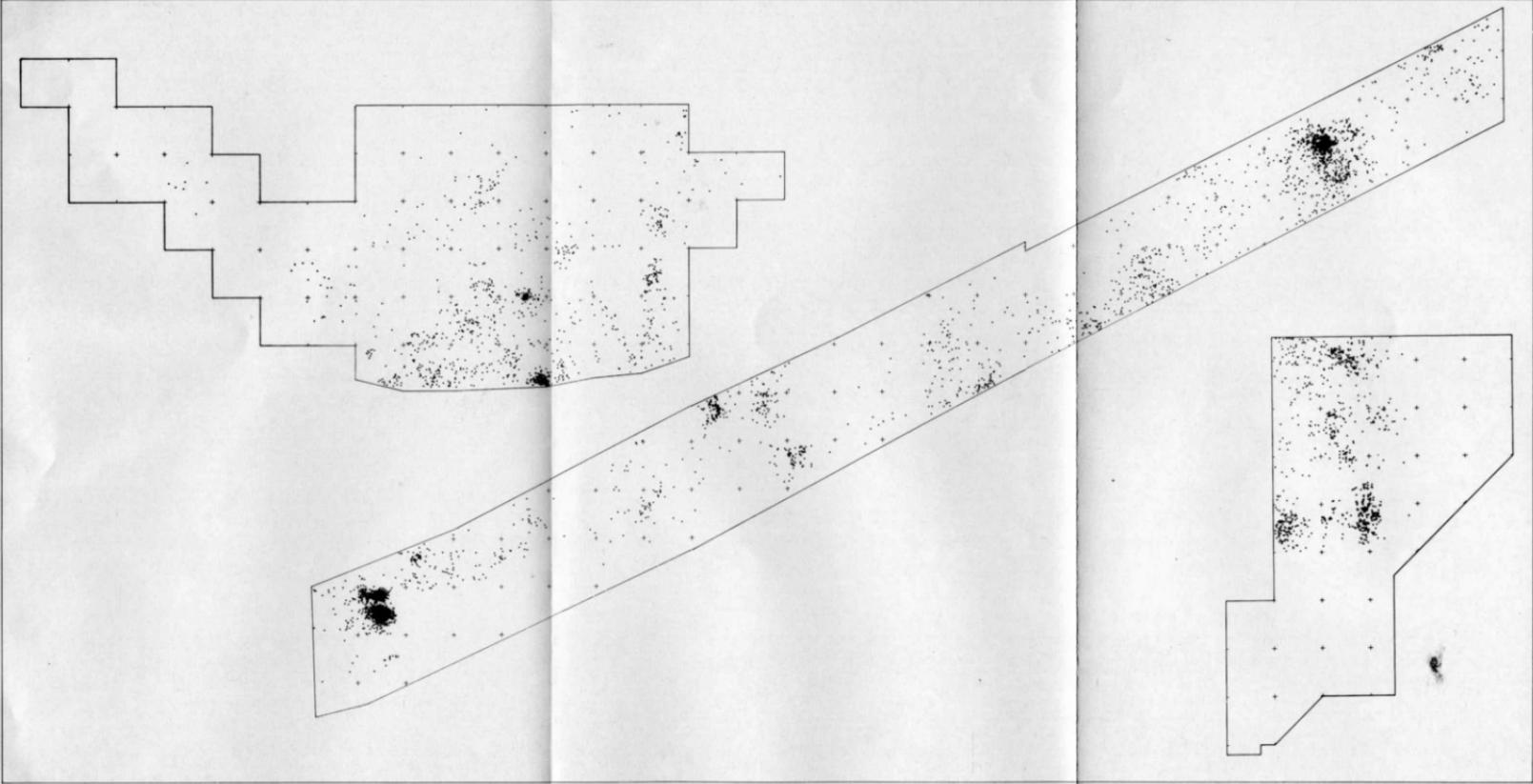
第VI層遺物出土状況写真(57区)



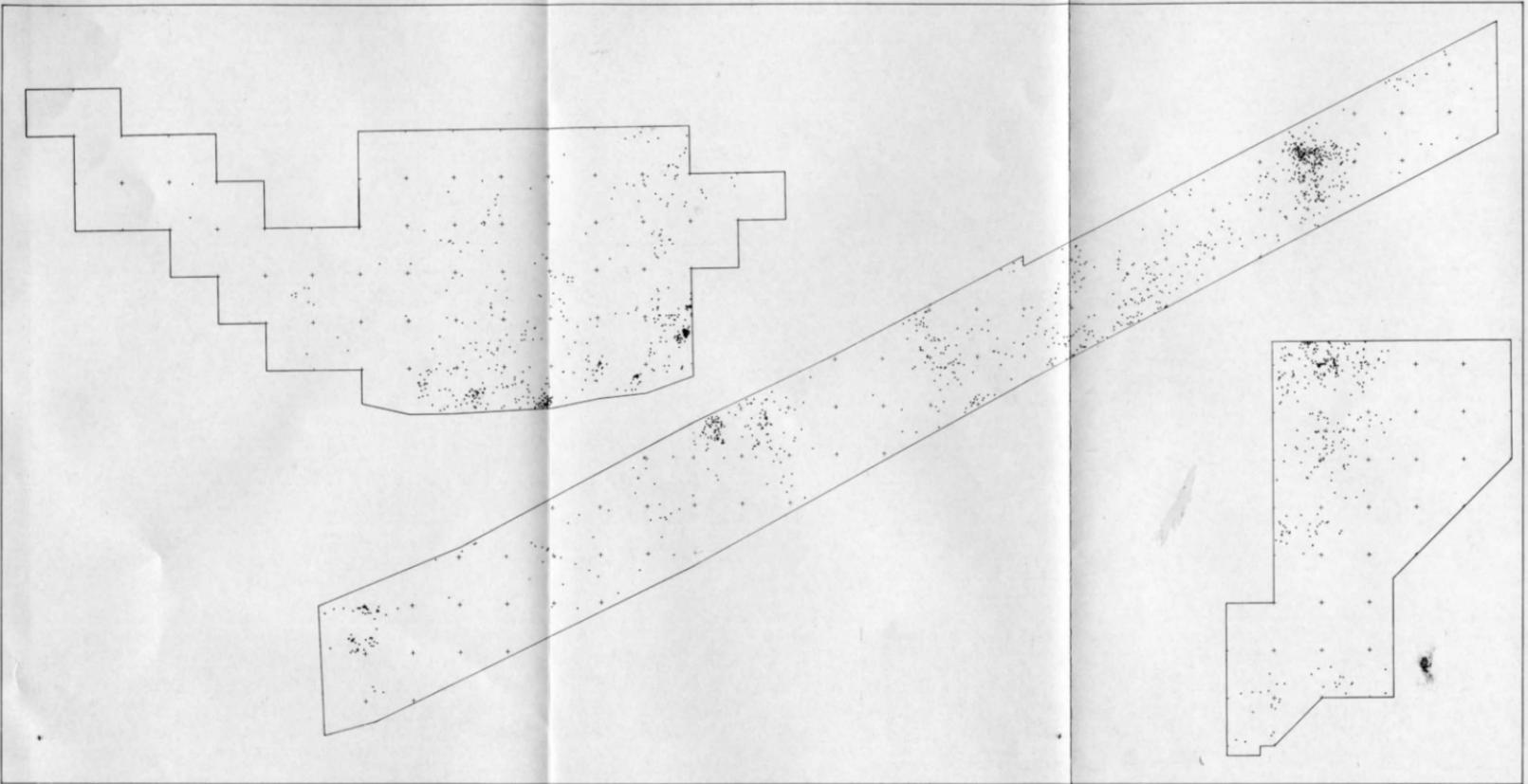
百花台遗址 第VI层出土遗物平面分布图



百花台遗址 第VI层出土遗物平面分布图



百花台遺跡 第V層出土遺物平面分布圖



百花台遗址 第IV层出土遗物平面分布图

IV. まとめ

以上簡単に触れてきたように、百花台遺跡は基盤としている黄色粘質土層（Ⅷ層）を除いてすべての土層が遺物包含層として、先土器時代から江戸時代までの遺物や遺構を包蔵している事実が判明した。とりわけ先土器時代の遺物はナイフ形石器・台形石器・台形様石器・尖頭器類・細石器などを主体として展開する。これらの共伴関係は一部に不明な点を残しているとはいえ、次第に明確化されつつある。同時に、原位置による実体把握により他の石器群・遺構等との関連をも捉えることが可能となりつつある。百花台遺跡におけるこれまで行われた数多くの発掘調査は、先土器時代研究に成果をもたらすと同時に大きな問題を提起している。各遺物の編年的研究・共伴遺物の解明等今後に残された課題も多い。

百花台遺跡の広がりは、当初予察していたよりはるかに大きく、またその内容もかなり充実している。近年急速に発展を遂げた火山噴出物の研究の恩恵を本遺跡も受け、鍵層となる基本土層が位置づけられたことは、各地の同期遺跡相互間の対比がより確実に行われるようになつた意義は大きい。遺跡は標高約250m付近を南限とし北側へと拡がりをみせる。台地の利用状況はその主体を台地端に置いているように思われる。台地中央部はその構成が粗の部分であり別の利用状況を考えるか、或いは全く利用されなかつたか今後追求されるべき課題である。

第2次学術調査で93点と集中して出土した百花台型台形石器は拡散化する傾向をみせるとされながらもその偏在性を示唆しているように思える。事実、これまでの調査では少量の出土例しかない。また、百花台石器文化の中に瀬戸内海的文化の影響を受けて展開する遺物群が存在することも注目されよう。



調查風景



長崎県文化財調査報告書 第78集

百花台遺跡

1985・3

発行 長崎県教育委員会

長崎市江戸町2-13

印刷 博文社印刷株式会社

長崎市茂里町1-42